

第41回原子力委員会定例会議議事録

1. 日 時 2008年9月30日(火) 10:30～11:15

2. 場 所 中央合同庁舎4号館10階 1015会議室

3. 出席者 原子力委員会

田中委員長代理、松田委員、広瀬委員、伊藤委員

日本原子力研究開発機構

石村理事

人形峠環境技術センター 黒沼所長

内閣府

牧参事官補佐

4. 議 題

(1) 方面ウラン残土問題の経緯とレンガ加工計画について

(2) 近藤原子力委員会委員長の海外出張について

(3) その他

5. 配付資料

(1) 方面ウラン残土問題の経緯とレンガ加工計画について

(2) 近藤原子力委員会委員長の海外出張について

(3) 第38回原子力委員会定例会議議事録

(4) 原子力委員会 政策評価部会(第26回)の開催について

6. 審議事項

(田中委員長代理) それでは、第41回の原子力委員会定例会議を開催します。

本日は、委員長がIAEAの総会に御出席ですので、代理で私が司会を務めさせていただきます。よろしくお願いします。

本日の議題は、^{かたも}方面ウラン残土問題の経緯とレンガ加工計画について。それから、ちょっと前後してしまいましたけれども、近藤原子力委員会委員長の海外出張について、その他ということになっています。

では、事務局から、お願いします。

(1) 方面ウラン残土問題の経緯とレンガ加工計画について

(牧参事官補佐) それでは、まず一つ目の議題、^{かたも}方面ウラン残土問題の経緯とレンガ加工計画についてということで、日本原子力研究開発機構の石村理事、それから人形峠環境技術センターの黒沼所長より御説明いただきます。よろしくお願いいたします。

(石村理事) おはようございます。原子力機構の理事をしております石村でございます。私は人形峠環境技術センターを担当してございますので、ざっとこれまでの^{かたも}方面ウラン残土の経緯につきましてお話をさせていただき、今それをレンガ加工して使っていく計画を我々立てておりますので、その概要についてお話をさせていただきたいと思います。

まず1ページのところでございます。御案内のとおり、我が国で最初に天然ウランの鉱石が露頭の状態で発見されたのは人形峠でございまして、昭和30年11月に鳥取県の三朝町側でウラン露頭が日本で初めて発見されてございます。

それから、既に50年という月日が流れてございますが、その50年の間に昭和30年代初頭にここを中心にウラン探査活動が行われておりまして、当時は原子燃料公社が昭和31年に発足をいたしまして、その公社がこの鳥取、岡山両県にまたがってウラン探査活動を進めてきたという状況でございます。

ただ、この探査活動も期間的には非常に短期間でございまして、特に鳥取側の2カ所、この地図でいいますと東郷鉱山、それから倉吉鉱山とございますが、このあたりは昭和30年代中頃に既に探査活動は終えてございます。それから、人形峠につきましても、その一部は昭和41、42年まで続けられましたが、そのあたりですべて終えてございまして、その後は閉山処置をきちっとして今日に至ってございます。

この原子燃料公社がこちらで仕事を始め、今日では人形峠環境技術センターとして人形峠のところで仕事をさせていただいておりますけれども、昨年ちょうど50周年という時期に当たりまして、昨年夏に、原子力委員会からも近藤委員長に人形峠にお越しいただいて、この50周年の式典で御祝辞をちょうだいいたしました。

そういう探査活動が行われ、それからそれ以降はこの人形峠はウランを中心とした活動をずっとやってまいりまして、製錬転換、ウラン濃縮といった仕事を続けさせていただきまして今日に至っておりますが、ここで開発した濃縮技術を日本原燃の六ヶ所工場に技術移転しまして、この人形峠からもたくさんの技術者が六ヶ所に技術の定着化のために出向している状況にあります。

そういう中で、当時の30年代の中頃まで行われました探査活動に伴いまして、どうしても鉱山の坑道、トンネルを掘っていきますと掘削土が出てまいります。その掘削土、当時はウラン残土と称されましたけれども、そういう土砂から放射線が発生しているといった指摘が一部の学者から指摘されまして、それが報道されて社会問題化したのがこの残土問題でございます。

次のページでございますが、私どもは、特にこういったことに反対される方たちからいろいろな指摘を受けて、たび重なる話し合いをしてきたわけでございますが、平成2年に至りまして、^{かたも}方面の捨石堆積場がございますウラン残土約3,000m³につきまして関係自治体の協力を得て撤去をするということを条件として、撤去する協定を自治会と締結をしたところでございます。

私どもこの協定を結んで以来、特に地元の鳥取県当局の御協力を得ながら、いろいろな撤去先をこの周辺について探したわけでございます。もちろん近くには私どもの人形峠センター、現場がございますのでそちらで処理する案も含めて様々な形での努力をさせていただきましたが、関係自治体の協力を得てというところの、受け入れ先の自治体の協力がなかなか得られないという状況がございまして、解決に至らなかったわけであります。

ちょうど平成2年から10年たった平成12年11月に、10年たってまだ残土が撤去されていないということで、この履行を求める裁判が地元から起こされて、地裁、高裁、最高裁といきまして、いずれも我々敗訴したわけでございます。私どもが撤去をお約束した3,000m³について撤去をすべきという鳥取地裁の判決が確定をしたわけでございます。

関係自治体の協力がなかなか得られない中で、我々はこの撤去が難しいというお話を再三にわたってしてまいりましたが、それが残念ながら聞き届けられずに撤去が命ぜられ、そし

てさらに、平成16年にはこの残土の3,000m³のうち、290m³は、昔この堆積場の中の貯鉱場といいますか、ウラン鉱石の保管をしていた場所があったわけでありすけれども、そういうところに置いてあったウラン鉱石に近いレベルのものが290m³あったわけでございます。それとそれ以外のものを峻別されまして、鳥取地裁はそのレベルが比較的高い、平均よりも高い290m³の撤去と、それ以外のものを分けて撤去しなさいと。それは強制金を伴いますと、こういう決定を出されたわけでございます。

私どもそれを真摯に受けとめて、290m³については特に鉱石レベルに近いこともあり、ウラン製錬をすることも可能ではないかということを含め、国内にはウラン製錬所はございませんので、海外の製錬所でそういったことが可能ではないかということを検討し続けたわけでありす。結果的にはアメリカの製錬所でこのレベルならば製錬ができると受け入れの可能性が非常に強くなったわけでございます。

次のページでございますが、この290m³につきましてはアメリカの製錬所に受け入れが可能であろうということが平成17年に至りまして大体見通しは得られましたので、地元の皆様にお話をし、そして17年8月にはそこから290m³を分けて袋詰めされたものを搬出して、9月17日までに撤去したということでございます。

その後、太平洋を越えてアメリカに持って行きまして、アメリカの製錬所に搬入をして、ウラン製錬をその年の12月までに予定どおり終了してございます。しかし、この裁判所の命令の期限よりも若干遅れたことに伴って、1億4,000万円ほどの強制金を地元の^{かたも}方面区に支払うことになりました。

4ページに残りの残土の処置を書いてございます。そういったことで290m³アメリカに持って行ってウラン製錬をしていただき、処置をいたしました。残りの2,710m³の扱いにつきましては平成18年に当時の文部科学大臣、小坂大臣と、鳥取県知事、そして三朝町長、当機構の理事長の間でお話し合いがされて、概略以下書いてございますような内容で協定書を締結しているところでございます。

50年という長い月日を経ているものでございますので、堆積場の中では地山化して元々の土と見分けがなかなかつかないところでありすけれども、それから峻別をきちっとして、2,710m³について掘り出しをして、撤去する。そして、それを原料としてレンガを製造して鳥取県外に搬出をしていく。そのレンガ工場の土地については鳥取県の県有地がございまして、その土地を私どもにお貸しいただけるということ。そして、製品が完了した後、1年以内にその工場については解体をして戻していくことを内容とする協定を結ばせ

ていただいております。

また、地元三朝町は御案内のとおり、ラドン、ラジウムの温泉として世界的に有名な場所でございますが、ウランに起因しますラドン、ラジウムなどが生体へ与える影響メカニズムを解明していく試験をやってもらいたいという地元からの強い御要望もございました。その研究を共同で行っていくことを内容とした協定を結ばせていただいております、その予定どおり平成18年8月から11月にかけて、この2, 710 m³についての撤去を行い、そして撤去した後の後措置をさらに1年かけて完了するというのをいたしてまいりました。この方面^{かたも}の土地というのは、御覧になっていただければ分かるのですが、大変急峻な斜面でございまして、難工事でしたが、無事終了したところでございます。

次に、レンガにしていく工場でございますが、平成19年5月にそのお借りした土地に工場を建て始めたわけでございます。5ページの下に写真をつけてございますが、非常に軟弱な土地でございまして、なおかつ狭いということもございましたが、ここしかお借りできなかったわけでございまして、2階建てにせざるを得ないということもありました。それから、この写真でもまだ雪が一部残っておりますが、冬場になりますと3 mからの雪になります。そういった豪雪に耐えられる建物にしなければいけないこともございまして、地盤の問題、あるいは雪との荷重を考えるとということで建物等についても問題があったわけでございます。設備等含めまして6億円ぐらいの経費をかけてこの建物、それからレンガ工場の中の設備、こういったものを整えて試運転を行い、試験用のレンガを作ってきたわけでございます。今日もサンプルをお持ちいたしましたので御覧になっていただきたいと思います。

こういったものを下から山の上に、2, 710 m³の残土を運び上げてきたわけでありますけれども、環境監視という点ではきちっと我々怠りなくやってきてございまして、それを鳥取県が独自に作っておられます専門家会議に定期的に御報告して、いずれも自然レベルの変動の範囲内という評価をいただいているところでございます。

プロセスのフローを書いておりますが、なにせ私どもレンガを作ることは全くの素人の領域でございますので、レンガの製造業者の方たちの御指導を得ながら、この工程を考えてきております。レンガを作るには一般的な製法としまして、焼き固める焼成という方法と、それからいわゆるセメント固化をしていく無焼成という方法と二つ大きくあるということですが、私どもはできるだけ安上がりになれる方法として、セメント固化の方法を選ばせていただきました。その方法で今試運転を行ってきたところでございます。

今後、下の工程にございますように、レンガ製造につきましては23年度の当初ぐらいで

終えていくことを考えておりますけれども、先ほどお話ししましたように、冬の間は非常に厳しい寒さになりますので、冬季間は運転ができない状況になってございます。

7 ページに物性確認試験と表題を掲げさせていただいておりますが、私どもが作るレンガが物性的にしっかりとしたものができる、それから安全面で問題ないことを第三者機関にしっかりと確認をしていただくことが必要だと考えまして、原子力安全技術センターにお願いをして、この品質の面、使用の面での安全確認をしていただいたところでございます。

これに当たりましては、特に使用の評価では三朝町にあります岡山大学の三朝医療センターに多大な御協力をいただきまして、その用地の一部を使わせていただいて、試験用に作りましたレンガを敷いて模擬歩道の試験をいたしたところでございます。

その試験の結果が8 ページに書いてございます。その岡山大学の三朝医療センターで模擬歩道を3カ所作らせていただいて、その表面の放射線量がどれぐらいになるかを測定していただきました。平均で $0.22 \mu\text{Sv/h}$ ということですが、三朝町はラドン、ラジウムの有名なところでもありますので、バックグラウンドにも放射線量がかなりあるわけですが、その自然放射線を含めて $0.22 \mu\text{Sv/h}$ ということでございます。私どもの身の回りの放射線、例えば花崗岩では高いところでは $0.2 \mu\text{Sv/h}$ という値が得られていますし、それから市販をされていますカリウムを含んだ化学肥料ですと20kg入りのもので $0.25 \mu\text{Sv/h}$ という値も発表されております。それから、市販されています耐火レンガですと $0.3 \mu\text{Sv/h}$ という値も報告されているところでございまして、そういった身の回りのものと比べてもこの $0.22 \mu\text{Sv/h}$ という平均値につきまして、私どもは、レンガはそういう低い値だと考えているところでございます。

また、レンガそのものの強度等の性能の面に関しましては、いずれもJIS規格のものに合致をしている結果が得られております。ウラン濃度につきましてはIAEAが規制の除外レベルとして決めています 1.0Bq/g の値を大きく下回る値が得られております。

また、ウランの溶出量につきましては、一般河川の平均的なウラン濃度であります $1 \times 10^{-5} \text{Bq/cm}^3$ と比べまして1桁低い値がレンガの水の溶出試験をした結果として得られているところでございます。

こういったことから、いずれも規格的には問題はないということでございます。

次の9 ページには、今度実際使うシナリオの上での評価もさせていただいておりますが、先ほどお話ししましたように、岡山大学の医療センター内に設けました模擬歩道の試験でのラドンの散逸率は毎秒 0.013Bq/m^2 でございまして、これは一般土壌と同じ程度とい

う評価をいただいております。

また、幅2mの歩道、延長500mという非常に長い歩道を想定しまして、その中で高さ1mの放射線量が最大でも0.06 μ Sv/h程度であると。それから、24時間いても年間の被ばく線量としては0.5mSvという評価で、一般公衆被ばく線量限度の1mSvを十分下回っているということでございます。さらに、この歩道を広場という概念で20m×500mという広場に中央に1日5時間いても、年間の被ばく線量は0.22mSvという評価もいただいているところでございます。

物性上も、それから安全使用上も何ら問題ないという結論をいただいているところでございます。こういう結論、物性確認試験の結果を踏まえまして、地元の三朝町にレンガ工場を置かせていただいているわけですが、そちらに試用計画いわゆるデモンストレーションをお願いできないかということ、9月に町議会に御提案をさせていただきました。歩道などを作らせていただいて、試運転で製作したレンガをデモンストレーションしていきたいと、9月の議会におきまして十分御説明し、また審議を重ねていただいた結果、試用計画について受け入れを全会一致で決定をいただいているところでございます。

最後に、今後の予定ですが、私ども今申しましたように、試用計画を三朝町で計画をしておりまして、場所などを町のほうで選定をいただいているところでございます。それを具体的に進めていくことと、レンガ工場そのものにつきましてもしばらく休んでおりますので、運転体制を再度整備して、それからさらに品質が上がる工夫もしまして、この11月から12月と大体2カ月かけて約100tの原料の掘削土を使ってレンガ製造をしていきたいと思っております。12月を超えますと雪が降ってまいりまして、気温も下がるものですから、冬季間は運転ができないかなと考えております。

できてきたレンガにつきまして、私ども基本的には当機構の拠点の中で使っていくことを考えており、一般の方にお使いいただくということはあまり考えておりませんが、拠点を中心に使用計画を今立てているところでございまして、この具体化を図ってまいりたいと考えているところでございます。

以上、雑駁になりましたが、御説明をさせていただきました。ありがとうございました。
(田中委員長代理) ありがとうございます。

それでは、先生方、御意見ありましたら。

(松田委員) 御意見というよりも、普通の人が持ちそうな質問を。私自身としたらこの取組がとてもいいモデルになるのではないかと思います。産業廃棄物問題という現場ですが、

採掘現場などが環境破壊になってしまったり、地元住民の方たちからすると凄く辛い思いをしたりということがありますので、長い時間かかりましたけれども、地元の方と関係者の皆さんでお互いに誠意を尽くしあって、放射線の理解を深めて、よい方向へ動き始めたということで、ありがたいなと思っています。

放射線については、分かりやすく地元の方々にお伝えすることが大切だと思うのですが、例えば御説明の資料の中で、もう少し具体的に説明していただきたいと思う箇所があります。9ページですけれども、「20m×500mの広場にレンガを敷設して広場中央に1日平均約5時間いても、」とお書きになっていますが、それは「365日いても」という意味ですか。それとも、「365日の中の5時間だけいても」という意味なのか。子どもたちが「5時間そこで毎日365日いても」ということであれば、もう少し詳しく書いていただくほうがいいと思ったりするのですが、いかがですか。

(黒沼所長) この評価は、「毎日5時間、365日×5時間いてもこの程度です」ということでございます。

(松田委員) そうですね。これは説明を受けたときに私も分かりにくいなと思ったのですが、「365日」という言葉がなかったので一般の方々には、すごく分かりにくい表現になっています。そうすると、上のもそういうことですね。

(黒沼所長) はい。

(松田委員) 365日いてもと。

(黒沼所長) 上の2m幅ですと、365日、24時間ずっとここにいるという評価でこの値ということでございます。

(松田委員) そういうふうにお話しただけると一般の方は、私も含めてすごく安心するので、これから地域の皆さんにお話しなさる時、それからこの事例は環境問題の解決の良い事例として、これからあちこちで話題になることだと思いますので、その時にそういうふうにお話ししていただきたいと思います。そうすれば、放射線そのものに対する理解もこの事例で深まっていくのではないかなと私は思っています。地元三朝町の方たちは放射線問題について、もうプロになったのだらうと思っています。

以上です。

(広瀬委員) 私もこの辺素人ですので、素朴な質問をさせていただきたいのですが。まず先ほどの24時間とか5時間というのは私も一瞬どうかと思ひまして、それが多分365日だろうと解釈しましたが、もう少し説明は付けたほうが良いと思います。

それから、この残土の問題は放射線が発生しているとの報道を契機として社会問題化したのですよね。それで、「3, 000 m³のうちの290 m³だけを」というのは多分放射線の高い部分をということですよね。それを製錬した。そこまでは良いのですが、他の残土をレンガにした結果、放射線の影響がほとんどないということですが、そうしますと、レンガにするとどうして放射線が出なくなるのですか、という質問です。つまり、放射線が出ているということで問題になった残土をレンガに加工し、そのレンガを敷いて広場にしても全然問題がないということは、薄めたということなのですか。

(石村理事) これは3, 000 m³全体のときに、放射線が出ているという騒ぎになったわけですが、その場合、特に290 m³に高いレベルのものがあつたわけでございます。そこに測定器を当てますとこれはかなりのレベルの測定値が出るわけです。当時の鳥取県の知事も、「その290 m³について早くきちっと処置をしてもらえば、残りについては自然の流れで、問題は解決する」と、そういうお話もされていたくらい、その290 m³について早く何とかしてもらいたいと、こういうことでございました。

放射線という意味ではその290 m³が特に大きな問題になったわけです。

(広瀬委員) そこは分かるのですが、残りはどうなりますか。最初から問題なかったということですか。

(石村理事) 我々は放射線レベル的にはそう考えておりますけれども、当時のやり取りではそこも含めて3, 000 m³全体について撤去するお約束をしたことになっていまして、冷静に突き詰めていけばまた別な解がそこにあつたのかもしれませんが。当時はいろいろ地元の方たちとの徹夜交渉が何日も続いて、その結果そういう協定が結ばれたということでございます。

(広瀬委員) そうしますと、レンガにする必要があつたのですか、というのが質問です。

(石村理事) 当時、我々は隣の岡山県側に人形峠事業所がございまして、そちらに残土を搬入をしたかったわけでありまして、岡山県知事は「隣の県で危ないというものを我々の県で受け入れるわけにはいかない」ということを盛んにおっしゃって、その時はもちろん290 m³も含めて危ないものという概念だったわけです。で、知事同士の議論のはざまにこの問題がはさまってしまい、にっちもさっちも動かなくなったわけです。そのイメージを変えていって、しかもその土自身をある形に変えれば、例えば建築資材として使っていけるというものに我々は変えて、使いやすい、受け入れやすい形にしていこうと考えた結果がこういうものになったということでございます。

(広瀬委員) そうすると、その土を建築用に使いやすくするためにレンガにすると、こういうことですね。何かもう少し安上がりにはできそうな気もしたのですが、ここで工場を建てて加工しなければいけなかったと言うわけですね。他にも日本国内にレンガ工場はあると思うのですが。

(石村理事) あります。

(広瀬委員) そういうところでは残土を持ち込むことが許されなかったということなのでしょうか。

(石村理事) それはこの話を日本国内に広げていけば、元々が「なぜ地元の鳥取県でそれをやらないのですか」という話になってくるわけですね。それを他の県に持って行くということは、岡山県知事がおっしゃっていた、「隣の県で危ないと言っているものを何でうちの県に持ってくるんだ」という意見になっていきます。そういうイメージが広がってしまったのです。ですから、これを何かにイメージチェンジしないと次の展開で受け取っていただけないと考えたのがこういう形なのです。

(伊藤委員) 今いろいろ御質問あるいはお答えもありまして、いずれにしても長年の懸案について決着がついたということで、この間の関係者の御苦勞に感謝申し上げたいと思います。

私も二、三年前に、本件気になったものですから人形峠に見に行かせていただきました。あのころは人形峠の土を使ったドールストーンと言って、タイル状に加工したものを作っているいろいろなものに使われていました。「このタイルを使ってサウナに貼ったらすごく体調がよくなった」という話があって、これは個人の状況ですから、それはそれで大変効果があるのだろうと思います。

人形峠は、日本の今の燃料サイクルのフロントを担う大事な遠心分離器の基礎固め、今は六ヶ所の新型遠心分離機ですが、これに大変重要な役割を果たしていた光の面があると同時に、これは影の面として長年の懸案であったということだったと思います。最初から振り返ってみますと、これは昭和30年代に始まった話で、当時の事情としてはこういう経過をたどってきたのもある意味やむを得ないと言ってしまうと語弊があるかもしれませんが、こういう経過をたどってしまったのもそれなりにしょうがなかったのかなという気がします。しかし、これは基本的には放射線、放射能というものを扱うリスクガバナンスの問題で、未だに言われている問題であります。その典型的な問題ではなかったのかなと思います。

今もいろいろ危険なレベルだったのか、そうではなかったのではないかというお話ありま

したが、安全問題というより信義の問題が基本的にあったと思います。国民全般の放射線、放射能に対する理解が広まっていない状況の中で、事業が開始され、事業努力はされたのですが、結果的に残土処理問題がここまで長引くことになった。そういう状況の中で信義の問題になってしまったと。やはりここにこのようなリスクに対するガバナンスが十分結果的に出来なかったということであったのではないかと思います。

今後ともこの問題は、そういう意味で貴重な教訓としてこれからも原子力関係者は、再び繰り返さないために、この教訓をよく踏まえなければいけない問題ではないかと思います。

こういう形で決着がついたわけですが、今もお話ありましたように、お金がかかったものですから、ぜひ有効活用を心がけていただきたい。

それからもう一つは、この問題はこれから廃炉などに伴うクリアランス品の有効活用にもつながっていく話だと思います。単にこれを事業所の中だけでリサイクルして終わらせてしまわないように、理解が広がるような形で進めていっていただきたいと思います。そうすることによって、これにかけたコストも、それなりに意味を持ってくると思います。これで終わりということではなくて、是非つなげていっていただきたいと思います。

やはりそれもガバナンスの一環だと思いますので、そういう形でやっていってもらいたいと思います。

いずれにしても、地元から御理解いただき、そして皆さんの御努力もあったということとで評価したいと思います。よろしくお願いします。

(石村理事) ありがとうございます。

(田中委員長代理) もう大体各委員から言い尽くされているので私が申し上げることはないのですが、一言だけ。今伊藤委員がおっしゃったことが非常に大事なことで、広瀬委員の御指摘の点は全くそのとおりで、固めたから放射線のレベルが変わるということではなくて、固めてしまったら電車の中でもどこでも持って歩けるという状況で、これをしなきゃいけなかった問題は単に^{かたも}方面だけで終わらなくて、伊藤委員がおっしゃったように、廃炉、廃棄物の問題が今後ありますし、多分人形峠にもまだ残土もいっぱいあるということですから、そういうことも含めて少し問題を整理して、事業者の経験、非常に厳しい経験を国、行政に反映していくことが大事だと思います。特に鳥取県と岡山県の間の相互の自治体間のはざまに入るような状況も生まれましたし、いろいろな課題がいっぱいあった経験を生かして、それを松田先生が言う良いモデルになるようにすることが大事だと思います。今のままで良いモデルというわけではないと思います。そういう点でよく整理して、このレンガを持って歩い

て全国にいろいろ宣伝して歩くなどをしていただければ良いと思います。

よろしく願いいたします。

ほかによろしいでしょうか。

(松田委員) 私も伊藤先生の御意見に本当にそう感じているのですが、これだけ安全なものだということが伺えましたので、放射線の学校教育のツールみたいな形でどこかに敷いて、そしてそこで測ってみてというような、そういういろいろなやり方があると思います。いろいろな方のお考えを有効活用するためにどうすればいいか検討いただいて、放射線はどんなものかを学んでいく仕組みを作って地元から発信していただければ良いなど。

(田中委員長代理) よろしいでしょうか。

どうもありがとうございました。

それでは、次の議題。

(2) 近藤原子力委員会委員長の海外出張について

(田中委員長代理) 近藤原子力委員会委員長の海外出張について、実は通常は出張する前に定例会で御報告ということになっているのですが、今回は先週定例会お休みをしましたので、遅れましたことを御容赦願います。

それでは、お願いします。

(牧参事官補佐) 近藤委員長の海外出張について私のほうから。資料は第2号になります。

出張先としましてはウィーンとパリとニースの3カ所でございます。

渡航目的の3. のところでございますが、まずウィーンで現在開催中の第52回の国際原子力機関（IAEA）の総会、これに出席をしてございます。それから、パリに参りまして、こちらで開催予定の第2回国際原子力エネルギーパートナーシップ（GNEP）の執行委員会、閣僚級の会合に出席予定でございます。そこからニースに参りまして、第15回日仏原子力専門家会合、N-20と通称されてございますが、この会議に出席する予定でございます。既にIAEAの総会につきましては昨日日本の政府代表演説が行われたところでございます。

私からは以上でございます。

(田中委員長代理) ありがとうございました。

これはそういうことですので報告させていただきまして。

では、次の議題。

(3) その他

(牧参事官補佐) その他議題は特にございません。

(田中委員長代理) では、次回予定をお願いします。

(牧参事官補佐) 次回、第42回の原子力委員会定例会議でございますが、来週10月7日、10時半から、会場はこの会議室でございます。

それから、原子力委員会では毎月第1火曜日の定例会議終了後にプレス懇談会を開催してございます。来週は第1火曜日でございますので、プレス懇談会を開催する予定でございます。プレス関係の方におかれましてはご参加いただけるようよろしくお願いいたします。

以上でございます。

(田中委員長代理) それでは、これで定例会を終わります。

ありがとうございました。

—了—